

信心銘について

松 田 文 雄

であると共に、數多くの禪僧の座右の銘ともなつていたものである。

しかるに、この「信心銘」について、近年來、初期禪宗史に關する研究成果が發表されるに及んで、再び、問題を投げかけられてきた。ここで「再び」という言葉を用いたのは、かつて「支那佛教精史」の著者が、その著述の中で「信心銘」の作者であると信認されている三祖僧璨大師の歴史的實在を否定されたことであり、そして、今、「信心銘」の三祖僧璨大師の親撰説に疑問がだされていることを意味する。その代表的なものは「禪宗思想史」の研究であり、その著者は「信心銘が僧璨の作であるとすることは疑うべき點が存すること。現在の信心銘には後世の改竄が少くないこと。信心銘の思想は牛頭法融 及び 永嘉證道歌とよく合していること。」の三點をあげて、その親撰説に對して、否定的見解をとつている。

「信心銘」は一般に「三祖信心銘」と呼ばれているように、中國禪宗の第三祖鑑智僧璨大師の著述であるといわれている。そして、それは「至道無難 唯嫌揀擇」にはじまり「信心不二 不二信心 言語道斷 非去來今」に終る四言百四十六句 五百八十四字という極めて簡潔な偈頌である。その文體は脚韻をふみ、嘯詠に適し、また、和文に讀み下しても漢語、禪語が適宜に配られ、吟誦にも好く、しかも、禪の教理を簡明に説いてもいるので禪の心を端的に示すものとして、讀誦に、祖錄の引用にさかんに用いられてきたものである。それゆえに、その開版、注釋拈提の上梓の數も、他の祖錄に比較して、かなり多く、「新纂禪籍目錄」によれば、單行開版十四回、注釋拈提としての上梓四十二種を數えることができる。勿論、その他藏經への收録も數多くある。このように「信心銘」は禪宗において最も親炙された祖偈の一つ

二

さて、この問題の解明には、「信心銘」が禪籍史、禪思想史の上にどのような位置を占めているかという点から考察しなければならない。今回は、その一端として、「宗鏡錄」に焦點をしばり、著者延壽が「信心銘」をどのようにに取り扱っているかという点について考えてみる。

まづ「信心銘」という名稱をもっている著述をさぐってみるに、

- 1 達磨大師信心銘
- 2 三祖僧璨大師信心銘
- 3 融大師信心銘

という三種のタイトルを見いだすことができる。そのうち「達磨大師信心銘」なるものは義諦の編集した「禪籍志」にその名をとどめるのみで、他の記録には全く、見出すことができないから世に流布しなかつたものであろう。また、内容を知る手がかりも全くない。「三祖僧璨大師信心銘」は「景德傳燈錄」卷三十、「緇門警訓」卷三などに収められているもので、それは一般に流布している「信心銘」である。「融大師信心銘」は「宗鏡錄」の中の引用文にのみ見出すことのできるもので、その内容は、短い引用文からではあるが、その大綱を知ることができる。しかし、それは、「信心銘」と

しては知られていない内容も含まれている。

さて、こゝにいう「融大師信心銘」の融大師とは、云うまでもなく、牛頭山の法融を指していることは明らかである。

「宗鏡錄」には「信心銘」に關する引用文の書き出しに

- 1 融大師信心銘云……（例文12）
- 2 信心銘云……（例文3456）
- 3 祖師云……（例文7）

という三種の記述の仕方をを用いている。この点から考えると「宗鏡錄」の著者は「信心銘」は牛頭法融の著述であるという意識のもとに書いていると受けとられる。

次に、それらの引用文を検べてみるに、

- 1 流通文と同じもの……（例文67）
- 2 流通文と違っているもの
 - a 流通文にあるが前後の句が轉倒しているもの……（例文5）
 - b 流通文に全くないもの（例文1234）

という型に分けることができる。以下、その例文を上げてみよう。

- | | |
|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1 融大師信心銘云
欲得心淨 無心用功
（卷十五大正藏四十八卷四九六b） 2 融大師信心銘云 | <ol style="list-style-type: none"> 牛頭山初祖法融禪師「心銘」
欲得心淨 無心用功 |
|---|---|

—— 同 右

惺惺了知 見網轉彌 寂
寂無見 闇室不移 惺惺
無妄 寂寂寥亮 寶印眞
宗 森羅一相

(卷三十七大正藏六三七a)

3 信心銘云

前際如空 知處悉宗 分
明照境 隨照冥蒙 一心
有滯萬法不通 本來自爾
不用推窮

(卷五大正藏四四四b)

4 信心銘云

縱橫無照 最爲微妙 知
法無知 無知知要

(卷九大正藏四六三a)

5 信心銘云

心若不異 萬法一如 眼
若不睡 諸夢自除

(卷八十一大正藏八六三b)

6 信心銘云

一卽一切 一切卽一 若
能如是 何慮不畢

惺惺了知 見網轉彌 寂
寂無見 闇室不移 惺惺無妄
寂寂明亮 萬象常眞 森羅
一相

同 右

前際如空 知處迷宗 分明
照境 隨照冥蒙 一心有滯
諸法不通 去來自爾 胡假
推窮

同 右

縱橫無照 最爲微妙 知法
無知 無知知要

「三祖僧璨大師信心銘」

眼若不睡 諸夢自除 心若
不異 萬法一如

同 右

一卽一切 一切卽一 但能
如是 何慮不畢

(卷八十五大正藏八八二a)

7 祖師云

不識玄旨 徒勞念靜

(卷九十大正藏九〇六b)

同 右

不識玄旨 徒勞念靜

この例文の對比から明らかであるように「宗鏡錄」の著者延壽のいう「融大師信心銘」なるものは「景德傳燈錄」卷三十に收められている「牛頭山初祖法融禪師心銘」の文であることを疑うことができない。そして延壽は例文3456に見られるように「信心銘云」という書き出しの下に「心銘」の文と流通文「信心銘」の文とを共に引用している。

思うに、一〇〇四年には「景德傳燈錄」が上梓され、その中に「信心銘」は三祖僧璨大師の著述であると明刻し、その事に疑問をはさむ學者もなく、南宋の眞宗皇帝に奉呈されているのである。そしてそれを遡ること四十三年前、この「宗鏡錄」が世にあらわれ、その時、著者延壽が、例文に示したような記録を残しているのであるが、このような記録を残したことに、次のような點を考慮することができる。

1 彼は「信心銘」と「心銘」を混同して用いている。とすれば、後に「宗鏡錄」の杜撰さが指摘されたように、その譏りは免れないものである。

2 あるいは、その當時「心銘」が別名「信心銘」とも呼ばれて「三祖信心銘」と共に世に流布していたのではないか

とも考えられる。しかし、そうであれば、學者の良識として、例文34には「融大師信心銘」例文56には「三祖信心銘」と明記し、はつきり區別すべきではなかつたかという難點が残る。

3 また、法融の「信心銘」が別名「信心銘」ともいわれて世に流布し、現在流通の「信心銘」が作者不明のまゝ傳つていたとも考えられる。

4 更に、現在流通の「信心銘」もその當時法融の作とみなされ、延壽もそれに従い「祖師云」の祖師は法融であるとの意識のもとに書いたものであるともうけとれる。

三

確に、「信心銘」が三祖僧璨大師の親撰であるというはつきりした記録は「景德傳燈錄」まで時代を下らねばならない。しかし「古尊宿語錄」に收められた「百丈廣錄」には「三祖云」として流通文「信心銘」の文が四ヶ所にも引用されている。とすれば、「信心銘」の三祖親撰説は少くとも百丈懷海（八二寂）より下ることはあるまいと考えられる。

この立場をとれば前節であげた第3第4の考え方は否定されなければならない。しかし、「寶林傳」「祖堂集」等の「景德傳燈錄」以前の史傳やその他の禪籍に「信心銘」についてふれていないという問題點が残っている。この點は禪籍史の再

見當と禪思想史の究明の必要をせまるものである。例えば、「百丈廣錄」自體一一七八年開版の「古尊宿語錄」に收められたもので原典批判の必要があり、また、「信心銘」の中の「虎明自照」「一即一切」の思想は華嚴思想に通ずるものと思われ、更に「信心銘」の心は「一心」なのか、「無心」なのかという點の究明も重要な課題となつてくる。

寄稿されなかつた諸氏の發表題目（一）

ローカーヤター試論

Tapas (2) について

「Dohakōsa」をめぐる若干の問題

法華經にみられる戒律的要素

初期大乘佛教における阿蘭若住について

四卷楞伽と禪

一切知の思想展開

中論疏における破成實の論理

プラサンナパダーに於ける有自性説批判

緣起と因待

日隈威徳

花木泰堅

奈良康明

久保繼成

望月良晃

西義雄

川崎信定

藤謙敬

福原亮諦

田中順照

（二六一頁に續く）